弓取

トスっという音がして、頭に何か刺さったようだ。
痛いというよりは、かゆいに近いような刺激だった。
僕は膝をついて、床に倒れ込んだ。その時、両腕をつかまれて、自然に僕の足は宙に浮いた。
体が軽いのだ。僕が足を動かすと、空気の中に少し重たい空気があって、その上を歩いている感覚になった。
両腕をつかんでいるのは誰だろう。僕は横を見回した。そこには、手だけの人がいた。手から先は薄くて見えなくなっている。そして声だけが聞こえる。
「あなたは選ばれました。今から一緒に来てもらいます」と。
「選ばれたとはどういうことです？」
「何に選ばれたかは、これからわかることです」
「では、どこへ行くのですか？」
「どこへ行くかは、これからわかることです。はい」
　ぼくは軽い足取りで、先を急いだ。急ぐ必要もないのだが、自然と足が向くという感じだった。
両腕を引っ張られる感覚と、自分の足で歩いている感覚が、妙に協働して、息ぴったりの二人三脚をしているみたいだった。

「はい、着きましたー」と手の主が言った。

「ここがどこだかまだわからないんですが」
「あなたには、これをしてもらいます」
「これ？」
「まずこの矢を持ち、射ってください」
　手がひらひらっと動くと、とたんに弓と矢が出て来た。
　黒曜石を矢じりにした、木製の弓と矢だった。
「何を射るんですか？」
「人をです」
「人を？そんなことはできませんよ」
「大丈夫。これは、矢じりの先端に、特別なコーティングがされてますから、当たってもそんなに痛くないんですよー」
「はぁ」
「そしてね、当たった人には、良いこともあるんです」
「良いこと？」
「そう。これは、なんと、思いをかなえる、弓矢なんです！」
「ははあ、なるほど。わかりました。じゃあ、私は、恋のキューピッドというわけですね」

「あ、勘違いなさらないでください。皆誰しも、いつだって恋をしたいと思っているわけではありません。人の願いは人それぞれ。それをあなたが、みいんな、かなえてあげられるのです。ね、素敵な仕事でしょう？ささ、早く射ってごらんなさいよ」
「まぁ、そういうもんですかね」
　縄文風の弓矢は気になったが、ちょっとやる気が出て来た。
「でもこれ、どうやってやるんですか？ぼく握力22なんですけど」
「気にしない、気にしない。ちょっと引いて、放すだけなんです。一度やってごらんなさいな」
「はーい」
　ぼくは弓を手に取ると、腕に力を入れて矢を引いた。その瞬間、一瞬あの手が現れて、ぐっと引くのを手伝ってくれた気がした。そして、手を離すと、ぴゅーっと飛んで矢が飛んで行った。
「ちょっと、今手伝ったでしょう」
「いえ、何も」
「今、見えたんですよ。あなたの手が」
「気のせいじゃないですか？さ、それより、矢があたりましたよ。よく見てください」
「何も見えないですけど」
「そんなはずはありませんよ。よく見てください」
　手がまたひらひらっと動いて、そこにはカードが一枚握られていた。
「このカードの小さな穴から、覗いてごらんなさい。見えますから」
「なんですか、このカード」と言いながらぼくはカードに空いている小さな穴を目に当てた。
「テレフォンカードです」
「ずいぶんなつかしいですね。もう持ってないや」
「ほら、どうですか？見えて来たでしょう」
　小さな穴から覗く世界は、周辺は少しぼやけていたが、遠くの景色がはっきりと見えた。
その中に、一人のサラリーマン風のおじさんがベンチに座って目を閉じているのが見えた。
「あの人にあたりましたよ」
「えっ？もしかして死んでしまった？」
　どうしよう、とぼくは思った。やっぱりコーティングなんてしただけじゃ、だめだったんだ。
「ご安心ください。寝ているだけです」
「え？寝てるだけ？」
「そうです。さっきまであの男性は、駅のベンチに座って、溜息をつき、こう思っていました。
「眠たい」と。そこであなたが放った矢で、あの男性は、睡眠を手に入れました」
「思いをかなえるってそういうこと？なんかぼくがいなくてもできそうだけど」
「そんなことはありません。眠い時に眠ることは、なかなか簡単にできることではないんですよ」
「そういうもんですか」
「では次は、あの女性に矢をあててみましょう」
　ぼくはまたテレフォンカードの穴を覗いた。そこには、髪の長い女性が歩いていた。

「あの女性は今、とても時間が欲しいと思っています。そこであなたが、時間をあげるのです」
「時間をあげる？」
「では、射って見てください」
　ぼくはまた矢を射った。また矢を引く瞬間だけ手がちらっと見えた。
「やっぱり手伝っているでしょう」
「いえいえ、そんなことないですよ。さあ、またまた命中しましたよ。さすが、私が選んだだけのことはある」
　女性は前と変わらずに歩いているように見えた。
「あのー、何も変わらないように見えるんですけど」
「そんなことありません。女性の右ポケットをご覧ください。さっきよりちょっとふくらんでいるでしょう」
「そうですか？」
「あそこに、時間が入っています。そして女性の顔。特に表情に注目してください。さっきより、満足した顔をしているでしょう」
「そうですか？」
「もう、彼女は時間に追われてはいません。時間を小さくまとめて、ポケットに入れてしまったのですから。もう彼女は時間から解放されました」
「そういうもんですかねえ。まるめたハンカチが入っているだけでは？」
「そんなことありませんよ。さぁ、次が今日最後の仕事です」
「あの公園で遊んでいる子どもを見てください」
「はい、いますね。女の子が」
「あの子は今、恋をしています」
「そういうのも、やっぱりあるんですね。キューピッド的な」
「はい、でもそのことじゃありません。あの子は、その恋をあきらめようとしています。それを手伝ってください」
「えっ、そんなこと！」
「時に、恋をあきらめるのは、恋をするより難しいものなのです」
「なんかいきなり格言みたいのでましたね」
「では、お願いします」
「事情もわからないのに、いいのかなぁ」
「それは、察してください」
　ぼくは矢を射った。またちらっと手が見えた気がしたが、もう無視した。
　砂場で遊んでいるその少女の頭に、その矢は当たったようだった。女の子はしばらく頭を押さえていた。そして、立ち上がると、水飲み場の方に行き、ごくごくと水を飲んだ。そして飲み終わると、ぷはーといって、口をぬぐった。その顔は、さっぱりとしていた。
「ふっきれたようですね」
「なんだかせつないなぁ」

「さ、これで今日の仕事は終わりです」
「さっきから、仕事、仕事って言ってますけど、これがぼくの仕事になっちゃたんですか？」
「そうですよ。あなた、矢に当たる前、何考えてました？」
　矢に当たる前？
　ぼくは記憶の底に沈んでしまっていた、頭の変な痛みを思いだした。そして思い出した。
「あぁ、そういえば、天職につきたいなぁって、思ってました」

終わり

【2016-09-16】指さし小説　第6話

配信が遅くなり、すみません！
今回のテーマは、弓取（り）でした。お相撲さんがやる弓取という意味もあったんですが、今回は、弓を射るのが上手い人という意味で、使いました。キューピッドのイメージが出てきてから急速に物語が出て来たのですが、その前はおすもうさんのイメージしかなくて、なかなかできなくて困りました。ありがとうございます。
http://p.booklog.jp/book/109810

著者：かっこ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/109810

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/109810

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ